

「イヤ／＼其方の額を洗ふのぢやない、矮狗の舌を洗ふて取らすのぢや」

「オ、／＼嘶家の額は矮狗の舌より汚いものと見へる、情ない事ぢや」

「ア、併し市兵衛、お前は何うぢや、用事が有るやうなら苦しうないから嘶家を置いて歸るが宜い、また用事がなくば只今何か酒飯でも出すから一杯飲んで歸れ、但は心急ぎなれば歸つても宜い、嘶家は御済になれば誰なりとも從けて其方の宅まで送らして取らすから」

「ヘイ有難う存じます、左様なれば私宅も無人でござりますので、此儘お暇を頂きたうござります」  
「ム然うか、夫れぢや嘶家をおいて歸るが宜い」

と申して居ります所へ御家來の衆が茶を汲んで丁盆に結構なお菓子を載せて持つて參りました。

「サア／＼マア茶など喫んで歸るが宜い」

「有難う存じます、……夫れでは是れでお暇を申します」

「ア、然うか、御苦勞であつたのウ」

「何う仕りまして、御免下されませ」

と大黒屋市兵衛は引取りました。後に堅丸は其のお菓子を食へまして澁いお茶を飲んで控へて居ります。稍あつて菅沼軍十郎様が、

「併し嘶家、嘶をば言上げるのに何か入用の物はないか」

「ヘイ、何卒見臺を拜借致したうござります」

「フム、當御殿には見臺といふやうな物はないが」

「左様なれば下駄箱か米櫃でも何卒」

「コリヤ／＼下駄箱だの米櫃、其様な物が御前へ出せるか」

「夫れでは何かお机でも」

「宜し／＼、机なれば如何やうな物でも有るから、然うしては何か他に要る物はないか」

「エー蠅臺を二挺」

「フム蠅臺を二挺」

「然うして、お火鉢を一個と土瓶にお白湯でも」

「土瓶、土瓶といふやうな物はない、銅の湯沸でも宜いか」

「ヘイ／＼金瓶でも銀瓶でも結構でござります、お盆にお湯呑を何卒添へて頂きたう存じます」

「ム、宜し／＼、それだけで宜いのか」

「夫れで結構でござります」

「併し當御殿をどうぢや拜見をさせてやらうか」

「夫れは結構でござります、御座敷の拜見が出來ますれば、何分御願ひ申します」